

委員長	吉江 あや子 (日義小学校)
副委員長	月岡 早苗 (上松中学校)
委員	小穴 裕一 (木祖小学校)
委員	所 健太 (上松小学校)

一 研究テーマ

自信をもって道徳授業をしていこう その2 ～道徳的価値にせまる発問をしてみよう～

二 テーマ設定の理由

「特別の教科道徳」の目標は、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」であり、具体的には「道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」とされている。また、今回の学習指導要領改訂では、指導のポイントとして、

- ①道徳教育を推進するための指導体制の整備
- ②指導方法の工夫
- ③道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

が挙げられている。

今年度本委員会では、昨年度の研究テーマ「道徳的価値にせまる発問はどうしたらよいか」で見えてきた、

- 〈1〉児童の実態をみて子どもたちへの発問やアプローチの行い方を考える
- 〈2〉「どうして」「なぜ」の発問ではなく、この材を使い、どこをねらっていくのかを明らかにしてから発問を考える

この2点を実践・検討することで、教師が「自信をもって道徳授業をする」ことができ、子どもたちがよりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことにつながると考え、本テーマを設定した。

三 研究内容

(1) 木曾郡道徳教育研究協議会の開催

- 指導案や実践レポートを持ち寄り、上記の研究の視点を踏まえて討議し、テーマに迫る。
- 道徳教育推進上の悩みなど日常に生きる内容にする。

(2) 郡内各校の情報交換、発信

- 研究協議会当日の様子やアンケート結果等を研究のまとめに記載する。

(3) 研究日程の概要

第1回	4月14日(月)	総委員会、活動内容、日程の確認
第2回	5月13日(火)	研究テーマ、活動計画の決定、郡研究協議会について
第3回	7月1日(火)	郡道徳教育研究協議会打ち合わせ
第4回	7月30日(水)	郡道徳教育研究協議会(準備、片付け、反省)

第5回 11月11日(火) 研究のまとめ

〔木曽郡道徳研究協議会開催要項〕

ねらい

実践事例をもとに、道徳的価値に迫るための発問の適正さや授業後のふりかえりなどを協議することを通して、学校における道徳教育の質の向上を図る。

日時 令和7年7月30日(水) 14:00~16:00

場所 木曽町文化交流センター 多目的ホール

日程

全体会 14:00~14:10

1. はじめの言葉(副委員長)
2. 助言者挨拶 渡邊由紀校長先生(三岳小、道徳同好会会長)
3. 連絡 協議会の進め方・時間等(委員長)
4. 終わりの言葉

分科会(小学校2、中学校2の4分科会) 14:10~15:30

*司会者を決める。記録は道徳委員が行う。

1. レポートにそって実践報告検討
2. 協議(質問・意見等)

【会場】

・小学校①	…ホール 前方 右
・小学校②	…ホール 前方 左
・中学校①	…ホール 後方 右
・中学校②	…ホール 後方 左

全体会 15:30~16:00

1. はじめの言葉(副委員長)
2. 各分科会で話題になったこと(記録者が簡単に発表)
3. 助言者の先生のご指導 渡邊由紀校長先生
4. 委員会より(委員長)
5. 終わりの言葉

〔各校の実践レポート概要〕

大桑小学校 2年

主題名 「きみが いちばん ひかるとき」(光村 道徳2年)

内容項目 A 主として自分自身に関すること(1) 善悪の判断、自立、自由と責任

発問に対して話題になったことや考察

○発問は、指導書に記述してある「よくないと思ったことを、注意したことはありますか。」から変更して、「みなさんはゆうきを出して何かをしたり言ったりしたことはありますか。」にしたところ、上手

くいかなかった。子どもたちにとって勇気を出すということのイメージがもちづらかったのかもしれない。授業の後半で、自分だったらやり返すという発言があり、今振り返るとその発言をみんなで考えることができたらよかったと思うが、時間が足りなかった。

開田小学校 1・2年生複式

主題名 「みんな じょうず」 (光村 道徳2年)

内容項目 A 主として自分自身に関すること (4) 個性の伸長

発問に対して話題になったことや考察

○指導書の「自分のいいところはどんなところでしょう。」という発問から、「人のいい所を見つけよう。」にして、取り組んでみた。友だち、家族の良い所についてたくさん意見が出た。みんなでいい所を見つけ合う中で、自分のいい所を発見できたらよいと考えての発問だった。少人数の為、1年生と2年生が一緒にやったことにも意味があったと思う。なかなか自分のいい所を自覚できない子がいるため、周りの子たちから褒められることが良い経験だと思うし、自分の良い所を認識できるようになっていくかもしれない。また、授業で扱った内容をこれからの生活に生かしていくには、教室に出た意見をまとめたものを掲示しても良いかもしれない。友だち、家族という身近な存在だったからこそ、いい所をたくさん出せるようになったのだと思う。

南木曾小学校 3年

主題名 「ともだちや」 (光村 道徳3年)

内容項目 B 主として人との関わりに関すること (9) 友情 信頼

発問に対して話題になったことや考察

○最初の発問は「友だちって何?。」という問いから始めた。はじめの段階では、「〇〇してくれる人」というイメージが強く、上下関係があるような捉え方だったが、授業を進めていく中で「本当の友だちには上下関係がなくてもなれる」という所まで、みんなの意見がまとまった。いかに反応しやすい発問を考えるかを大切にしている、それにはなるべく自分事として考えやすいように、身近に感じられるように内容を工夫した。発表の仕方についても工夫したことで、子どもたちの意見が出やすい環境につながっていたと思う。教師との対話、全体での意見交換、グループ・ペアでの意見交流等、できる限り多くの子どもたちの意見を聞けるように発問の内容に合わせて考えていく必要がある。

木曾養護学校小学部 1～3年

「日常生活の中で考えていること」

○特別支援学校では、道徳という教科としての授業には取り組んでいないが、日常生活全体の中で、常に意識しながら子どもたちと接している。実態によってはSSTのようにこの時はこうするという方が分かりやすいこともある為、自分で考える力をつけることも大切にしながら、実態に応じた指導を続けていきたい。

王滝小学校 全校

主題名「みんなの自由な公園」 資料「NHK for School「ココロ部！」

内容項目 C 主として集団や社会との関わりに関する事

(10) 規則の尊重 (11) 公正、公平、社会正義

発問に対して話題になったことや考察

○王滝小では「全校道徳」を行っている。本教材では学年の発達段階に即して、「問い」を設定した。特に「公園利用のための決まりをつくる」という活動では低学年でも考えやすかった。「この後公園はどうなると思いますか。」という問いについて、学年によって反応が分かれる場面が見られた。「禁止はほんとに良いことなのか。」「どんな決まりを作ればみんなが満足できる公園ができるか。」という発問では、学年が上がるとともに道徳的価値に迫る反応が見られた。(仕切りを作る、遊ぶスペースを確保する、ペットにリードを付けるなど) 今後の可能性として、異学年で同じ道徳的価値に迫る題材を扱う場合でも、学年の発達に応じた発問を行うと全校で同じ道徳的価値について考えることができるのではないかと。また、課題として、低学年と高学年が同じ空間の中で、どのように発問を行うべきか、今後模索していく必要がある。(低学年と高学年を混合させた授業を行う必要性は？そもそも難しいのでは？)

三岳小学校 3・4年

主題名「つまらなかった」 資料「きみがいちばんひかるとき」(光村 道徳4年)

内容項目 B 主として人との関わりに関する事 (10) 相互理解、寛容

発問に対して話題になったことや考察

○中心発問が指導書の通りだと思しにくいと、補助発問を工夫した。児童との対話で、問い返しを重視して価値に迫った。「どちらの意見にあなたは近い？」という「共感や葛藤」を引き出す発問も有効である。今後の課題として、授業の「ふり返し」に記述して欲しい内容につながる発問の検討が必要である。題材に出会い、発問を受けた児童が自分の行動を振り返れるように工夫するとよい。

木祖小学校 4年

主題名「正直」五十円分」 資料「きみがいちばんひかるとき」(光村 道徳4年)

内容項目 A 主として自分自身に関する事 (2) 正直、誠実

発問に対して話題になったことや考察

○児童の心情を揺さぶる発問を意識している。タブレット端末を用いて、スライドで意見を提示すると、普段意見を言わない児童の意見も共有できた。他者の意見を聞いて自分の問題として考えることができた。(心情の揺れ、葛藤する姿が見られた) 発問によって、題材を自分事として捉えられるよ

うに工夫した。普段の生活に置き換えられる題材だと思ししやすい。発問が児童の意識や経験則と乖離があると題材と価値に迫れないため、題材から離れて行かないように、発問と題材の内容を精選する必要がある。発問によって「本当は五十円使いたいけど、返さなければ…」という葛藤を生じさせることができた。

福島小学校 4年

主題名 「土曜日の学校」 資料「きみがいちばんひかるとき」(光村 道徳4年)

内容項目 B 主として人との関わりに関すること (8) 礼儀

発問に対して話題になったことや考察

○「礼儀正しいってどういうこと?。」という問いからすぐに「めあて」を設定する。ロールプレイで正座をしてお辞儀をされたら「ちゃんと教えてもらわなければいけない。」「お互い良い気持ち。」という児童の心情が見とれた。心情の揺れ(葛藤)を生み出す発問は難しい。ロールプレイは当事者の心情に自分の心を投影させることができるため、価値に迫る発問も作りやすい。「礼儀正しくすることってどういうこと?」の発問をしてからのロールプレイは考えやすい。逆に「礼儀正しく無い場面」についてのロールプレイも良い。「○○なことも礼儀だよな?」など、様々な相手、友達同士など、多様な視点での礼儀についての発問があっても良い。

日義中学校 1年

主題名 「親友」 資料「きみがいちばんひかるとき」(光村 道徳1年)

内容項目 B 主として人との関わりに関すること (8) 友情、信頼

発問に対して話題になったことや考察

○「突っ立たままの『僕』はどんなことを思っていたのだろう。」という発問に対して、異性との距離に悩む気持ちといった、教師の予想していた考えが子ども達から出てこなかった。子ども達の実態としては、小学校から単級で変わらないメンバーで過ごし、男女分け隔てなく生活してきたことで、異性との距離感の意識が薄くなっているため、男女間の意識が薄かったのではないか。例え、予想と違う答えが返ってきたとしても、色々な考えがあることを共有できるのは、考えが深まっていることにつながるのではないか。

上松中学校 1年

主題名 「魚の涙」 資料「きみがいちばんひかるとき」(光村 道徳1年)

内容項目 C 主として集団や社会との関わりに関すること (11) 公正、公平、社会正義

発問に対して話題になったことや考察

○「さかなクンが『広い空の下、広い海へ出てみましょう』と伝えたかったことは何であったか。」という中心発問へつなげるために、「広い海」や「狭い水槽」が、それぞれ何を例えているかを全体で確認した。イメージを持ってない生徒が予想を超えて多くいたため、イメージを捉えられている生徒複数人に発表させた。イメージを持たせるために、今回の題材で言うと、水槽や海のイラストを使った視覚支援が必要である。最後の振り返りをする中で、こういう考えをもっている子いるとクラスで共有できる。ただ、子どもが本音や思ったことを書けることが重要なので、内容によって、共有しない方がよい時もある。

大桑中学校 1年

主題名 「席を譲ったけれど」 資料「きみがいちばんひかるとき」(光村 道徳1年)

内容項目 B 主として人との関わりに関すること (6) 思いやり、感謝

発問に対して話題になったことや考察

○「導入、状況把握」「自我関与」「他者理解」といった道徳の観点に沿って発問ができた。

「思いやりで大切なことは、どんな考え方だろ。」という発問は、生徒には難しかったように感じた。例えば、「思いやりをもって『行動する時に』大切なことは何だろう。」というように、何か具体的に提示するような発問が大切である。

南木曾中学校 1年

主題名 「自分の地域の『宝』って？」 資料「きみがいちばんひかるとき」(光村 道徳1年)

内容項目 C 主として集団や社会との関わりに関すること (16) 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度

発問に対して話題になったことや考察

○「夏休みはなぜあるのか。」という発問は、子ども達に有意義な休みを過ごしてほしいという授業者の願いがあった。題材の順番を入れ替えることで、より生徒が自分事として考えられる時間になる。今回、総合的な学習で地域素材を学習しているからこそ、自分事として引き寄せ、「夏休み中に地域の行事や活動に積極的に参加することで地域の宝を守ることができる。」「地域の宝である自然を守るような活動をしていきたい。」といった考えをもつ生徒が多く見られた。自分達の地域を知っているからこそ、「守りたい」という考えになったのではないか。

木曾町中学校 2年

主題名 「人って本当は？」 資料「君が一番光るには」(光村 道徳2年)

内容項目 D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

(22) よりよく生きる喜び

発問に対して話題になったことや考察

○自分の持つ強さや弱さを見つめながらよりよく生きるために大切なことを考えた。

発問1「孟子と荀子の考え方のどちらの方により納得がいくだろうか。」

スケールチャートで自分の立場を見えるようにしたことはよかった。

発問2「孟子、荀子の考えをもとに自分の生き方を見つめてみよう。」

自分の持つ強さや弱さを見つめる観点が抜けてしまった。自分事として生徒がもっと考えるようにするには、生徒の言葉から、「悪（弱さ）」はどんなものなのかを押さえると、一般的な理由ではなく自分によせた理由が書けたかもしれない。

開田中学校 全校

主題名 「泣いた赤おに」 資料「泣いた赤おに」（光村 道徳1年）

内容項目 B 主として人との関わりに関すること (8) 友情、信頼

発問に対して話題になったことや考察

○資料は小学校のとき学んだかもしれないが、もう一度学び直したらどんなことを感じたり、考えたりするかに注目した。

発問1「青おにの提案を受け入れた」赤おにの判断はよかったのだろうか。」

発問2「友情のためなら自己犠牲はありか。」

赤おに、青おにどちらの立場で考えるかによって、生徒の考えも変わりそうだった。

自分だったらどうしたか、どうすればよいのか、など具体的な案を引き出せるような補助発問があるとよいかもしれない。

ロイロノートの座標軸シートを使ったことで、自分の立場の位置をはっきりさせることができた。また、全校の考え方を確認できたり、各グループの話し合いを把握することができたりした。

(3) 助言者のご指導（三岳小学校 渡邊由紀校長先生）

道徳教育は、道徳性を養うこと（よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと）を目標にしており、全教育活動を通じて行うものである。大切にしたいことは、

①自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考えること

②自己の生き方について考えを深めること

の2点である。そのためには、子どもたちの発言に対して適切な問い返しをして、「どうしてそう感じたのか。」の根拠を理解しようとするのが大切である。「視点を広げる」「考えを比較する」「考えを揺さぶる」等の状況に応じた問い返しが考えを深めていくことにつながる。

また、授業の工夫として、

- ・心のバロメーターを使って考えを見える化する
- ・誰もが自分の考えを表現できるように、文字であらわすことだけに捉われずに子どもの実態に合わせて表現方法を考える

などが有効である。どんな方法であっても表現できる・しようとする姿を大切にしていきたい。

(4) 委員の反省と参加者の感想

①日時、会場等について

- ・午前の夏季大学の後、午後木曾文化交流センター開催を継続する。
- ・委員は開始1時間ほど前に会場入りし、会場設定をした。分科会のメンバーを学年ごとにしたことで、話しやすい環境が整えられた。

②運営、内容等について

- ・分科会で委員が記録係を担当するようにあらかじめ決めておいた。

③参加者の感想

- ・主発問だけでなく、補助発問や葛藤の場面、導入の工夫や日常生活への生かし方について、それぞれの持ち寄った教材を通して情報の交換・共有ができ、よかった。
- ・同じ学年のグループ分けだったことで1学期に取り組んだ題材の振り返りになったり、他の学校の取り組みを知ったりすることができた。
- ・実践を聞き、学びを深めることができた。また、自分が悩んでいること・難しいと感じていることを共有し、解決の見通しをもつことができ、2学期に実践してみようと思った。
- ・小学1～3年生の担任をしている先生方とのグループで、よく似た子ども達の姿や授業者、支援者としての悩みがあり、より実感を持ちながら意見交換ができた。
- ・レポートを作成するにあたり、発問を精選した授業を行ったことで、自分の学びに繋がった。
- ・低学年グループは、気持ちの言語化が難しい子や自分のよさに気づきにくい子もいるため、心情の視覚化やイメージがわかりやすい発問を心がけたいと思った。
- ・「道徳って色々考えられるから好きなんだよね～」と子どもに思ってもらえる授業にしたい。
- ・教材を読むときの視点についても聞くことができ、大変勉強になった。内容項目にせまる授業について今後、実践を重ねていきたい。

(5) 明らかになったこと（道徳教育研究協議会）

- ・「どうして」「なぜ」といった発問だけでなく、この材を使ってどういった発問にするのか、どこを狙っていくのかを明らかにすることで、道徳的価値に迫ることができる。
- ・目標を何にするのかによって発問が異なる。授業の入り方や発問を切り口にするすることで、比較検討しやすくなる。
- ・クラスの実態や学校行事に合わせて題材を選ぶとよい。

(6) 今後の課題

①授業内の「教師の発問」に関して

研究協議会の中では発問に関しての難しさが話題として挙げられた。その一つに指導書の発問通りに授業を行っても授業がうまくいかないという意見が出た。教師が道徳の教材研究を進めていくときは、教科書通りではなくクラスの実態や内容項目に合わせて教師自身が発問を考えていく

ことの必要性や重要性を再認識した。子どもたちがより深く考えられるような発問を問い続けていく。

②委員会の反省

- ・ 道徳教育協議会は道徳授業の実践を持ち寄り、ふだんの授業について相談しあえる良い機会となる。
- ・ 学年が同じ先生同士をグループにすることで自由に話し合える時間が十分に確保されて良い。
- ・ 委員の仕事は主に研究協議会開催について行った。回数もちょうどよく話し合いもスムーズに進められた。引き継いでいきたい。
- ・ 今年度は「道徳」協議会として実践の持ち寄りをしたが、委員会の名前は「道徳・人権教育委員会」なので、今後は「人権」分野の実践を持ち寄ってもよいと感じる。